# 黒埼町の今昔

執筆　宮田栄門

## 新聞からたどる黒埼の歴史（四十一）

### 健児団は団体生活のルールを学ぶため、キャンプ訓練を聞念寺の境内でよく行ったという。

（先月号の続き）

**発団時の団員たち**

昭和十年に日曜学校ができると静応師は、翌十一年、大野小学校五年生以上、高等科までの生徒の中から希望者を募り健児団を組織した。入団者は石川久四郎、小松秀雄、小熊七男三郎、海津一夫、長谷川武二、高橋芳衛、大野周助、田辺伝平、鈴木忠市、横木栄八、宮村久三郎、永井昇平、中山修、森山清白、石川進、鈴木金一、東条勝平、古川正男、宗村宗春、星野静恵、高橋正、浅妻久四郎、鈴木昭、森田政吉、渡部正美、家根久一郎と、入団の多少早い遅いはあったが、健児団結成当初の団員たちは以上の人たちだった。

**健児団活動とエピソード**

**一、団体生活を教えたキャンプ訓練**

健児団は、よく聞念寺の境内でキャンプをした。今では境内に少しの空き地もないほどに墓ができ、この境内で当時幾張ものテントを張ってキャンプをしたなど、とても想像できないが、聞念寺の住職（故）本多敏麿師の話によれば、昔は墓も現在の半分位で、土堤から下りた山門のあたりから墓地の真ん中部分や、本堂前の左右にかなりの空き地があって、キャンプはそのあたりで行われたという。

キャンプと言っても困ったことに、彼らの団には予算の関係からテントがなく、その都度団員が交通不便な遠い道のりを何時間もかけて三条別院まで借りに行った。しかし、借りられるテントは現在の軽便で簡単な組立式のものと違って、古くて組み立ての難しく重いズック製のものがたいてい一張位しか借りられなかった。そのため足りない分はテントの代わりに蚊帳をつって寝たので、天気の悪い日は、いつ雨が降るかと、ヒヤヒヤしながらのキャンプだったという。静応隊長は、キャンプもまた大切な訓練の場としてとらえ、子供たちに団体生活のルールを基本から教えた。一班（一つのテント）をたいてい六人から八人位とし、各員にそれぞれの受持ちを分担させ、テントの組み立てから飯盒炊飯（はんごうで飯をたく）等、すべてを班の責任においてやらせた。小さい子供は燃料にするたき木ひろいや簡単な作業を、大きな者は重い力仕事などを受け持つ等、みんなが力を合わせて貴重な団体生活を体験した。昔から「同じ釜の飯を食う」という諺があるが、そうしたことから尋常科五年位から高等科二年まで四歳位の隔たりがあったが、互いに連帯感が芽生え、まるで兄弟のような気持ちになったという。「今のような陰湿ないじめではないが、昔もいじめはあった。しかし、健児団に入っている下級生へのいじめは、先輩団員の目が光っていてなかったようだ」と、元団員の小熊さんは話している。キャンプではまた、飯盒を使った飯のたき方の外に、手旗信号や緊急時のロープの結び方、人工呼吸の方法なども教えられた。

手旗信号は、紅白の手旗を左右の手に持ち、その二本の手旗でカタカナの文字を相手に向かって逆に書き、遥か遠く離れた相手に読ませてこちらの言葉や意志を伝えるものだが、はじめはなかなか通じなくて困ったそうである。この手旗信号について話は大きく前後するが、戦後のボーイスカウトの一員だった宗村奎助さんから、次のような手旗についての思い出話を聞いた。

**一、阿賀野川畔で手旗による貴重な体験**

昭和十六年に大谷健児団が解団し、二三年にボーイスカウトとして復活して二年後の昭和二五年ころのこと。星野静恵隊長に引率された日本ボーイスカウト西蒲原第一団（黒埼隊）の隊員たち十数名は、阿賀野川の西岸にキャンプし、同じく川の東岸にキャンプした豊栄のボーイスカウト岡方隊と、川を挟んで手旗での交信訓練をした。その時黒埼隊のスカウトの中に、現山田小学校校長の宗村奎助さんがいた。「いやー、あんなに広くて、大声を出しても届かない、また肉眼では相手の顔も識別できない阿賀野川の対岸と、手で振る手旗で意志の疎通ができたのですからねー。感動しました。その時のことを今もはっきりと覚えていますよ」。

注　これは健児団ではなく、戦後に復活したボーイスカウトの時の話であるが、手旗のエピソードとしてここに引用した。

**一、楽しみだった聞念寺境内でのキャンプ**

元健児団員だった小熊七男三郎さんは「私たち黒埼健児団は、豊栄の岡方健児団や酒屋の健児団などと、一緒によく三条別院へ泊まりがけのキャンプに行った。そこで手旗信号やロープ結びの競技、ゲームなどをした。俵柳の誓林寺にも、ここは聞念寺の親戚と聞いているが、ここにもよく行った。キャンプで忘れられないのは聞念寺境内でのキャンプだ。そのころ日中戦争の真っ最中だったので、食糧不足から健児たちはみな家で雑炊かなんか、ろくなもんしか食べておらず、何時も腹をすかせていた。自分たちは高学年だから我慢できたが、小さい子供たちが可哀相だと思っていたら、静応隊長の奥さんのキヨイさんという人が、おにぎりをたくさんつくって、皆に食べさせられたので、聞念寺のキャンプは健児団みんなの楽しみだった」。

**一、キャンプに大蛇が出たと大騒ぎ**

昭和十四、五年ころの夏のある日、聞念寺健児団で一番小さかった星野静恵少年の属する金巻班（仮称）が、金巻の諏訪神社の境内でキャンプをすることになった。今は神社の境内は綺麗に整地されているが、そのころの境内や池はとてもそんなものでなかった。境内の端から池の周辺には人の背よりも高い雑草やガツボなどがびっしりと茂っていた。

（次号に続く）

元健児団の左から田辺伝平さん、小熊七男三郎さん、星野静恵さん

# ロングランの絵画展がはじまる

## 雪梁舎美術館で早津剛展が開幕

**町では、美術育成財団雪梁舎及び新潟日報社と共催で『雪国の民家　早津剛展』を開催しています。期間が二月二十一日から三月三十一日までというロングランで、初日の二十一日は、主催者や早津氏がオープニングセレモニーを行いました。**

早津氏自らが作品を説明する

テープカット

初日は、午前十時三十分からオープニングセレモニーが行われ、初日入場者は約百六十人、早津氏や主催者である町長、雪梁舎捧賢一さん、新潟日報社尾島静さんがあいさつしました。早津氏は、「関係者のご協力により、この展覧会が開かれることに感謝しています。前期と後期で作品を入替えますので、ぜひ、どちらも見てください」。と話していました。そのあとテープカットが行われ、早津氏自らが、『緒立の家』を含む油絵や水墨画の数々を説明してくれました。展示作品数は前期（三月九日まで）が五十五点、後期（三月十日～三十一日）が五十四点で、どれも消えゆくカヤブキなどの民家を描いたもので、会場に訪れた多くの人たちは、その作品のかずかずに見いっていました。この展覧会は三月三十一日まで、黒埼町民の方は左の無料入館券をお持ちのうえ、ご来場ください。

※これからの行事予定

**◎早津剛氏講演会**

▼日　時　三月十日(日)
　午後一時三十分～
▼北部地区公民館
▼入場料　無料

**◎中ノ口沿線美術めぐり**

▼日　時　三月十二日(火)
　午前八時四十分役場前集合
▼対　象　沿線町村の成人一般、各町村二十人
▼参加費　一人一〇〇〇円
▼見　学　沿線町村の美術館、資料館及び中ノ口沿線美術展
▼申し込み　社会教育課（☎三七七―三一〇一）


**早津剛展 無料入館券**

本券1枚で町民1名に限り雪梁舎に無料入館できます

有効期間
平成8年2月21日(水)から
平成8年3月31日(日)まで



**早津剛展 無料入館券**

本券1枚で町民1名に限り雪梁舎に無料入館できます

有効期間
平成8年2月21日(水)から
平成8年3月31日(日)まで

**早津剛展 無料入館券**

本券1枚で町民1名に限り雪梁舎に無料入館できます

有効期間
平成8年2月21日(水)から
平成8年3月31日(日)まで

**早津剛展 無料入館券**

本券1枚で町民1名に限り雪梁舎に無料入館できます

有効期間
平成8年2月21日(水)から
平成8年3月31日(日)まで

**早津剛展 無料入館券**

本券1枚で町民1名に限り雪梁舎に無料入館できます

有効期間
平成8年2月21日(水)から
平成8年3月31日(日)まで